

世界遺産を用いて 地理的な見方・考え方を働かせる授業の構想 —「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を事例に—

Yang JaYeon(ヤン・ジャヨン)

I.はじめに

世界遺産は、1972年のユネスコ(UNESCO)総会で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約(Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage, 以下、世界遺産条約)」によって、世界各地の顕著な普遍的価値を持つ文化遺産及び自然遺産を、人類共通の宝物として世界遺産登録することで保護し、次世代に継承していくことを目的としている(今野, 2018)。2019年6月30日から7月10日まで行われた第43回世界遺産委員会の審査の結果、現在登録されている世界遺産は1121件(文化遺産: 869件, 自然遺産: 213件, 複合遺産: 39件)である¹⁾。日本には、第43回世界遺産委員会の審査結果を基準にすると、23件の世界遺産(文化遺産: 19件, 自然遺産: 4件, 複合遺産: 無)がある。

世界遺産は、その目的及び形成意図から学校教育の中で素材として取り入れられてきた。その試みとして、世界遺産を素材とした教材化研究及びカリキュラム開発研究が挙げられる。教材化に関する研究として淡野は、小学校社会科(淡野, 2006)・中学校社会科地理的分野(淡野, 2007)・高等学校地理歴史(淡野, 2009)において世界遺産の教材化を行った。これらの研究は、各学習指導要領の内容を踏まえながら、日本のみならず世界諸国の世界遺産を素材として教材化した。さらに、カリキュラムに関する研究として今野(2018)は、新設される高等学校「地理総合」と持続可能な開発のための教育(ESD)の接続を考え、高等学校における科目「世界遺産で学ぶ地理」の1年間(3学期)カリキュラムを開発し実践した。

しかし、世界遺産は毎年世界遺産委員会が開かれ、新しく追加及び抹消されるなどその変動があるため、変動がある世界遺産は、まだ教育素材として十分に研究されていない。これは、日本の世界遺産として比較的最近である2018年に登録²⁾された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産(Hidden Christian Sites in the Nagasaki Region)」を素材とした世界遺産教育がまだ多く行われていないことから言える。

以上を踏まえて本研究は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の一部である

黒島を用いて、地理的な見方・考え方を働かせる授業を構想し提案することを目的とする。この目的を達成するために、以下の研究課題を設ける。第一に、黒島を含めた「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産として認定された価値、特に教育的に次世代につながる内容を明らかにする。そのため、文献調査及び実際の野外観察を行う(第Ⅱ章)。第二に、地理的な見方・考え方の視点から、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」のうち、黒島を中心に検討する(第Ⅲ章)。そこで、黒島における宗教景観に関して野外観察と資料収集を行う。第三に、地理的な見方・考え方の視点を働かせるために、黒島の世界文化遺産及び宗教景観を用いた地理授業を構想する(第Ⅳ章)。具体的には、野外観察から収集した景観写真や地域住民とのインタビュー調査の結果や収集した資料を基に授業を構想する。

Ⅱ. 世界遺産としての黒島と世界遺産教育

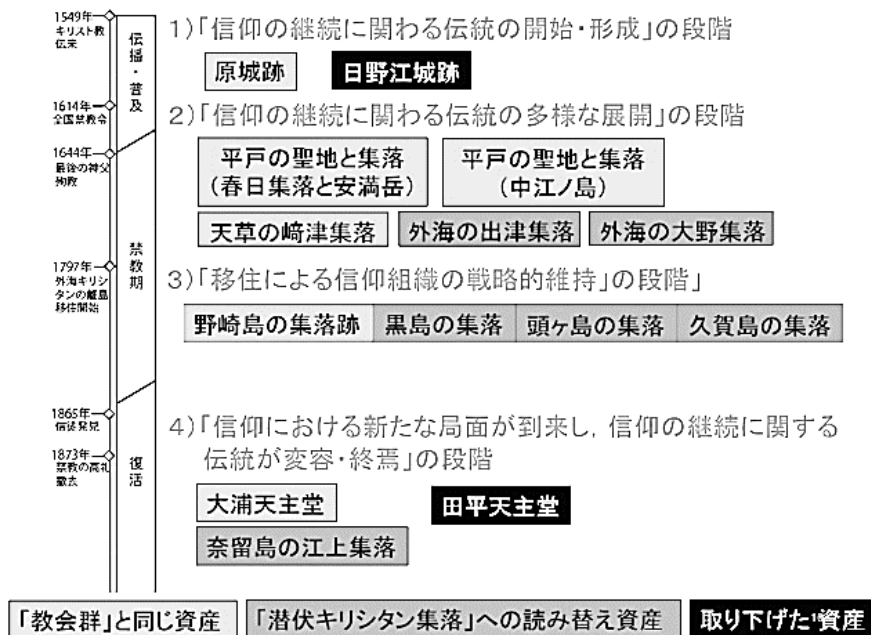
1. 黒島と世界文化遺産

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、日本の最西端に位置する離島を含む地において潜伏キリシタンがどのようにして既存の社会・宗教と関わりつつ信仰を継続していったのか、そして禁教が解かれた後、どのように彼らの宗教的伝統が徐々に変容・終焉し、近代を迎えていったのかを示している(文化庁, 2017)。

松井(2016 ; 2018)によると、「長崎の教会群」におけるキリスト教伝来以降を、大きく4つに区分することができる。第1段階は「信仰の継続に関わる伝統の開始・形成」、第2段階は「信仰の継続に関わる伝統の多様な展開」、第3段階は「移住による信仰組織の戦略的維持」、最後の第4段階は「信仰における新たな局面が到来し、信仰の継続に関する伝統が変容・終焉」である。本研究の調査対象地域である黒島は、主に第3段階に該当する(第1図)。

黒島は、17世紀に平戸藩の牧場が設置されたが、馬よりも田畑の必要性が増したことにより、19世紀初頭に廃止される。平戸藩が牧場跡地の再開発のために開拓民を誘致した結果、移住者が新たに7つ(古里(ふるさと)、東堂平(とうどうびら)、日数(ひかず)、根谷(ねや)、名切(なきり)、田代(たしろ)、蕨(わらべ))の集落を形成した。移住者の中には、外海地域などを出身地とする多くの潜伏キリシタンが含まれており、7つの集落のうち古里集落を除く6つの集落が潜伏キリシタン集落である。

潜伏キリシタンは、牧場跡の再開発のため、開拓民の誘致がなされていたことから黒島を移住先として選ぶことにより、共同体を維持しようとした。黒島に移住した潜伏キリシタンは、仏教寺院に所属して表向きは仏教徒を装いつつ、ひそかにマリア観音を拝んで自分たちの信仰を続けていた。「信徒発見」後、カトリックへ復帰した黒島の潜伏キリシタンは、禁教期の指導者の家を「仮の聖堂」とした。



第1図 「長崎の教会群」における世界遺産のコンセプトと構成資産の対応
(松井(2018, p.258)より引用)

1879年には、各集落から利便の良い島の中央に、木造の初代黒島教会堂が建てられ、1902年には煉瓦造の現在の教会堂に建て替えられた(佐世保市, 2018)。

2. 世界遺産教育の3つの分類

世界遺産は、文化遺産、自然遺産、複合遺産のカテゴリーがあり、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」はその中でも文化遺産に属する。文化遺産は、顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群、遺跡、文化的景観などを指す。いずれも歴史上、学術上、芸術上、あるいは人類学上すぐれた価値をもつものが該当する。自然遺産は同じく、地形や地質、生態系、絶滅の恐れがある動植物の生息や生息地を含む地域のうち、学術上、保全上もしくは自然美において普遍的価値を有するものである。また両者の規定を満たすものを複合遺産としている(文化庁, 2007)。

さらに、世界遺産条約に基づく世界遺産の保護・保全にあたっては、世界遺産のもつ価値の重要性に対する人々への一層の啓発教育が必要であり、ことに学校における体系化された教育が必要であることを指摘している(淡野, 2009)。

田淵(2011)による世界遺産教育(World Heritage Education)に関する内容を今野(2018)は、次の3つで整理している。第一に、世界遺産についての教育(Education about the World Heritage)は、世界遺産の理念や各世界遺産の遺産価値を学ぶなど、一般的に多く実施されている授業や単元の中で主題的に世界遺産を取り上げた教育形態のことを指す。

第二に、世界遺産のための教育(Education for the World Heritage)は、本来の世界遺産制度の目的である保存や保全のために、世界遺産に対して私たちがどのようにふるまうべきかを考えるものである。

第三に、世界遺産を通しての教育(Education through the World Heritage)は、第一、二の学習を基に、国際理解教育、平和教育、人権教育、環境教育などの教育分野に思考を広げていくものである。本研究では、第一の世界遺産についての学習をもとに、第三の世界遺産を通して、地理的な見方・考え方を働かせる授業を構想する。

III. 地理的な見方・考え方の視点からみた世界遺産黒島

「地理的な見方・考え方」は、中学校学習指導要領解説(平成29年告示)社会編(文部科学省, 2018), 高等学校学習指導要領解説(平成30年告示)地理歴史編(文部科学省, 2019)に示されている, 地理的分野の学習を通じて育成される資質・能力のうち, 「思考力・判断力・表現力等」に関わる視点である。また, これらの視点は, 社会的事情的な地理的な見方・考え方を働かせた具体的な授業の中で, 重要な問いとして用いられるものである(文部科学省, 2019)。

この視点は, 国際地理学連合(International Geographical Union, 以下IGU)地理教育委員会(Commission on Geographical Education, 以下CGE)が1992年公表した地理教育国際憲章(中山修一訳, 1993)の地理学研究の中心的概念(以下, 5大概念)に基づいている(第1表)。つまり, 5大概念は, 「位置(の規則性)・分布(パターン)」, 「場所(その場所の自然や人文的特性)」, 「知人相関(自然と人間生活の関連性)」, 「空間的相互依存作用」, 「地域(空間的に意義のある範囲)」を意味する(井田, 2017)。

世界遺産である黒島を通して, 地理的な見方・考え方の視点を用いて宗教地理学の面から考察し, その結果を基に学校地理において適用可能な教材を構想する。

1. 黒島と「位置・分布」

本節では, 黒島を「位置・分布」の視点から「その宗教集落はどこに位置するのか」, 「なぜそこに位置するのか」の二つの問いに焦点を当て分析する。

a) それ(黒島, 黒島の集落)はどこに位置するのか

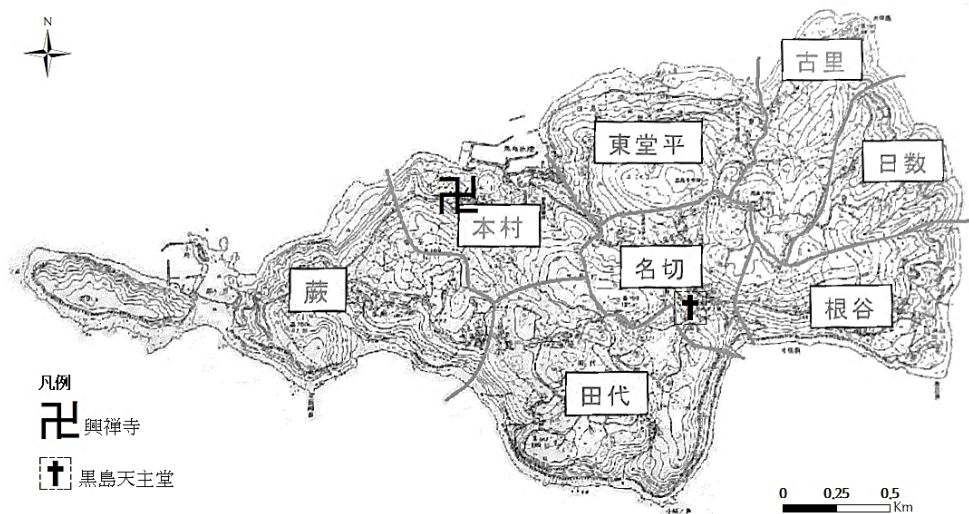
黒島の絶対的位置(site)は, 北緯33度07分51秒から33度09分05秒, 東経129度30分15秒から129度33分01秒である。相対的位置(situation)としては, 西には佐世保市がある本島, 東には長崎県南松浦郡があり, 北には長崎県平戸市, 南には東シナ海を接している。

黒島内の集落は, 大きく8つの集落(本村(ほんむら), 古里, 東堂平, 日数, 根谷, 名切, 田代, 蔵)に構成されている(第2図)。佐世保市教育委員会(2011)によると, 仏教人口がカトリック人口より多い村(仏教集落)は本村と古里である。東堂平, 日数, 根谷, 名切, 田代, 蔵はカトリック人口が仏教人口より多い集落(カトリック集落)である。このように, 同じ宗教を持つ人々が集落を形成する傾向が見える(第2表)。

第1表 地理学研究の中心的概念

1) 位置と分布	人間と場所は、この地表面においてそれぞれ異なる絶対的位置と相対的位置とを有している。これらの位置は、財と人間と情報の流れで結び合わされており、地表面上での分布とパターンを説明してくれる。また、人間と場所の位置に関する知識は、地元、地域、国家、地球上でのそれぞれの相互依存関係を理解するための前提条件となる。
2) 場所	場所は、自然的にも人文的にも多様な特徴を示す。自然的特徴に含まれるものには、地形、土壌、気候、水、植生、動物、人間生活、などがある。また、人間は、それぞれの信念や哲学にしたがい、文化、集落、社会・経済システム、あるいは生活様式などを発展させる。場所の自然的特徴に関する知識、あるいは人々の環境への関心や行為は、入閣と場所の相互依存関係を理解するための基礎となる。
3) 人間と自然環境との相互依存関係	人間は、自然環境を多様に利用する。また、様々な働きかけにより、多様な文化景観を造り出す。人間は、一方で自然諸要素の影響を受けるとともに、他方で、身の周りの環境を調和の取れた景観に変えたりときには不調和な景観へと変化させる。つまり、空間における複雑な相互依存関係への理解が、環境計画や環境管理、あるいは環境保護にとって大変重要なものとなる。
4) 空間的相互依存作用	<p>資源は、一般にこの地球上に不均等に分布する。資源の自給自足ができる国など存在しえない。また、場所は、資源や情報を交換するために、運輸・通信システムにより結ばれている。さらに、空間的相互依存作用に立ち入ってみると、財や情報の交換、あるいは人口移動による人々の協力を理解することにつながる。</p> <p>また、空間的相互依存作用を探求することは、現代の問題を浮き彫りにしたり、地域的、国家的あるいは国際的な相互依存作用や協力関係の改善へのアイデアを提起したり、あるいは、貧困と富裕並びに人類の福祉への深い理解をもたらしてくれる。</p>
5) 地域	ある地域は、固有の要素により特徴づけられた一定の空間的ひろがりをもつ区域である。例えば、政治的要素からみれば、国家や都市が、自然的要素では、気候や植生地帯が、さらに社会・経済的要素からは、開発の進んだ国々と低開発諸国などが区分される。地域は、空間的にも時間的にも躍動的なものである。地域は、研究のための、あるいは変貌をとげる環境としての基礎単位として取り扱うことができる。地理学者は、地域をいろいろと異なった規模、つまり地域社会、国家、大陸、地球規模で研究の対象とする。地域のもつ統合的システムは、一つの地球的生態系の概念へと導かれる。地球システムの中の異なる地域の構造と発展過程の理解は、人々の地域的、国家的アイデンティティ及び国際的立場を明らかにするための基礎となる。

(国際地理学連合・地理教育委員会(中山 訳, 1993, p.106-107)より引用)



第2図 黒島の集落分布図
(佐世保市教育委員会(2011)を基に筆者一部修正)

そして、第2図にある集落分布図に表れている集落ごと区分した境界線から見ると、島内唯一である寺(興禪寺)は、仏教集落である本村にある。同じく唯一なカトリック教会(黒島天主堂)はカトリック集落である名切と田代の境付近にある。名切と田代は島内で最もカトリック人口が多い集落である。

b) なぜそこに位置するのか—分布・パターン

Ⅱ章で述べた通り、天明5年(1785)段階の移住は牧場との関係から本村、東堂平、古里、名切、田代に対して行われたと考えられる(佐世保市教育委員会, 2011, p.41)。

『家世伝』及び『家世伝草稿』によると、享和2年(1802)に黒島牧が廃止されたことが記されている。そこには「御領分中其外他邦より居付相願候者は…」との記述があり、黒島牧が廃止された1803年から、平戸藩からも黒島の沖には西彼杵半島から江島、平島経由で五島に向かう人の流れがあった。それと共に、近隣である大村藩から五島藩からの移住が政策に伴い他の藩からも希望者による自由入島が可能になった(佐世保市教育委員会, 2

第2表 各集落別仏教とカトリック人口(平成22年12月1日基準)

集落	本村	古里	東堂平	日数	根谷	名切	田代	蕨
宗教								
仏教	51	46	2	0	0	17	7	4
カトリック	6	15	74	16	26	103	104	67

(佐世保市教育委員会(2011)より筆者作成)



写真1 仏教集落の景観(本村)
(2019年10月28日 筆者撮影)



写真2 カトリック集落の景観(蕨)
(2019年10月31日 筆者撮影)

011)。つまり、牧場開発のために黒島に入島を希望する者に許可を出すという形をとっていた。

明治元年(1868)に「五島崩れ³⁾」が起き、その時に五島を脱出した人々の一部が黒島の根谷を中心に定着することで、黒島への最後の移住者になった(佐世保市教育委員会, 2011)。その結果、黒島へと移住民の中には外海地域などを出身地とする多くの潜伏キリシタンが含まれており、新たな7つの集落のうち6つは潜伏キリシタン集落として形成された(文化庁, 2017)。その集落は、今現在まで続けており、島の北方に仏教集落である本村と古里、それ以外のところにカトリック集落として日数、根谷、名切、田代、蕨、東堂平がある。

2. 黒島と「人間と自然環境との相互依存関係」

本節では、黒島を「人間と自然環境との相互依存関係」の視点から見るために、「黒島での生活は、周囲の自然環境からどのような影響を受けていたり、与えたりしているか」の問いに対して、カトリック集落と防風林の関係に焦点を当て分析する。

カトリック集落は外部から見えないぐらいの巨大な木や山林に囲まれている形で形成されていることがわかった(写真2, 3, 4)。一つの集落だけではなく、本村を除いた集落でこのような形態が見られた。

理由の1点目は、島の南に東シナ海と接しているために、季節風や波からの防風林が必要だったことが考えられる。前述したように、他の島がある東・西・北の方より、黒島の南の方は黒島より規模が小さい島(江島, 平島)はあるが、東シナ海を向かう位置にある。そのために、夏の季節風(南東又は南西方向から)や南・北緯5~20度の熱帯海上で発生し中緯度に移動する熱帯性低気圧(例えば、台風)の影響が大きいところである。

特に蕨集落では、家や畑まで防風林に囲まれている。これは特に蕨は南風や西日が強い



写真3 カトリック集落の家屋(田代)
(2019年10月29日 筆者撮影)



写真4 カトリック集落の家屋(日数)
(2019年10月29日 筆者撮影)

ため、多くの家で風に強く、横に広がる性質をもつアコウの木が防風、遮光のために家の南側に植えられている(佐世保市教育委員会, 2018)。潜伏キリスタンが島に入島する前(15～16世紀)からすでに黒島を領有した、西家を中心にした集落(本村)も島の北の方である。このように、すでに仏教を中心とした住民の集落が島の北部に集落を形成していることも、季節風や台風からの影響を避けるためだと推察される。

理由の2点目は、カトリックが禁止された時期に信仰を守るための工夫だと考えられる。前述したように19世紀初頭平戸藩では開拓のため島に移住させる場合、本土あるいは本島から見える場所に住まわせることが通例であり、藩の政策として移住させたのであれば本



第3図 蕨集落の家屋と防風林の配置

(佐世保市教育委員会(2011)を基に筆者一部修正)

土(この場合は平戸島)が見える北側を中心に住ませたと考えられる(佐世保市教育委員会, 2011)。

平戸藩から黒島は南に位置し、そこから見やすい黒島の北の山麓の部分には、仏教集落である本村が形成されている。そこには年に1度「踏み絵」が行われていたと伝えられている本村役所や興禅寺などが位置された。

いずれにしても黒島に移り住んだ潜伏キリスタンたちは、先住者との関係でどうしても不便なところ、地味の良くないところに住まざるを得ず、非常に苦勞して生活していたことは代々語り継がれている(佐世保市教育委員会, 2011)。

以上を踏まえると、主にカトリック集落で見られる防風林や山林に家が囲まれている形の形成理由は、第一に植生を自然災害(代表的に台風)から家を守るためであること、第二に、幕府や藩の為政者による弾圧・迫害から信仰を守り続けるためであることと考えられる。言葉通り防風林を壁のようにし「潜伏」しながら信仰を続け、信仰を守っていたことがわかる景観は現在も確認することができる。

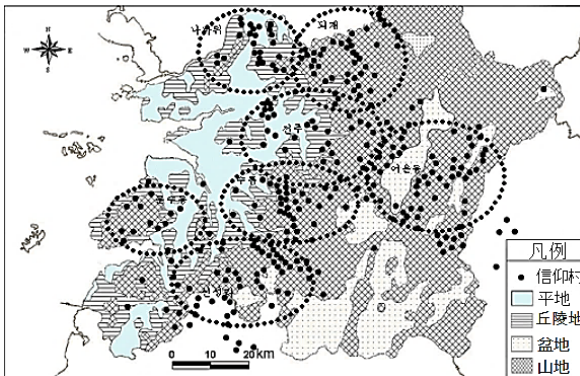
3. 黒島と「場所」—地方的特殊性と一般的共通性に焦点を当てて

本節では、黒島を「場所」の視点から分析するにあたって、黒島と同じようカトリックが禁止された時期があった韓国の全羅北道のカトリック信仰を隠しながら守り続けた人々の地域との比較を行う。

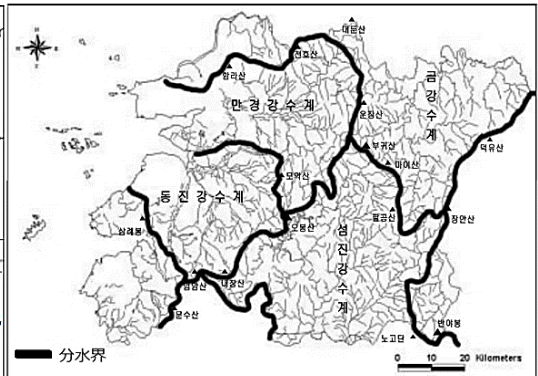
その際に「カトリックが禁止された時期に「信仰を守りたい」カトリック信者(キリスタン)への弾圧・迫害があった場所には、どのような共通点と相違点があるのか」という問いに焦点をあてる。それに対して、黒島と全羅北道それぞれそこでしか見られない地方的特殊性と迫害があった地域に見られる一般的共通性を探る。

日本と同じく、韓国においてもカトリックが迫害された時期がある。韓国にカトリックが初めて入った1784年から、フランスと条約を締結(1886)するまで、政府から様々な形と規模で迫害⁴⁾が行われた。邾(チェ)(2003)は宗教地理学の視点から、カトリックが禁止された朝鮮時代末の時期にカトリック信者集落と隠れた聖堂の形成を、全羅北道を事例として明らかにした。全羅北道は、西は海岸、東は最高1614m(香積峰)の山岳地代である。そのため、中国から西海岸に船で隠れて神父が到着し、東の険しい山に隠れこみ、カトリック信者集落と聖堂の機能を果たす信仰村を確保することで、カトリック信仰を守ってきた。

1907年のカトリック信仰村の分布図(第4図)をみると、最も多い信仰村が分布するところは山岳地である。特に、行政区域の境になる分水界(河川次数が低い)のところに集中分布している(第5図参考)。その理由の第一は、政府から信仰が見つかった場合、他の行政区域に避難しやすい点である。第二は、監視の目から離れるために、平地から遠く人が土地利用することが難しい傾斜が激しい山奥の谷間に集落を形成することが多かったためであると考えられる。つまり、全羅北道において隠れて信仰を守ってきたカトリック信仰村は、険しい山の分水界のとなりに立地することが確認された(邾(チェ), 2003)。



第4図 韓屋聖堂と管轄区域(1907年)⁵⁾
(최(チェ)(2003, p.94より引用)



第5図 全羅北道の水界⁵⁾
(최(チェ)(2003, p.14より引用)

同じ目的(カトリックが禁止された時代に信仰を守り続ける)を持っていた、黒島の潜伏キリシタンと全羅北道カトリック信者たちは、似ていながらも違う集落を表していた。黒島では、前述したように本島(平戸)からの見えないように防風林から囲まれる形で隠れて集落が形成されていた。一方、全羅北道カトリック信仰村も政府から見えないよう山奥の山岳地に隠れて集落を形成していた。

つまり、それぞれ異なる自然環境(地方的特殊性)の中で、禁教期に為政者から信仰を守る目的で隠れた集落を形成(一般的共通性)した、黒島の潜伏キリシタンと全羅北道カトリック信者の工夫の結果として残された景観や記録などを観察することは、場所を理解する一つの方法になると考えられる。

4. 黒島と「地域」—地域社会に焦点を当てて

本節では、黒島を「地域」の視点から分析するにあたって、「同じ地域で異なる宗教を信じる人々は、どのように共生してきたか」という問いに焦点をあてる。ここでは、黒島内の仏教とカトリックを信じる地域の生活から見出す。

黒島は、前述したように元々居住していた仏教徒と移住してきたカトリック信者が共生してきた地域である。牧場開拓による島内に入島が始まり潜伏キリシタンは、本村集落の興禅寺に所属し表向きとしては仏教徒として寺に所属していた。

その根拠になる第一点目は、興禅寺の過去帳に記載された檀家の数の変遷である。その数は、文久2年(1862)は20人、明治3年(1870)は16人、明治4年(1871)は14人であったのが、明治5年(1872)は6人、明治6年(1873)5人のように、1872年以降の記載者が激減している。これは、1865年の大浦天主堂における「信徒発見」の後、黒島の潜伏キリシタンが1873年の禁教高札の撤廃を待たずに自らの信仰を表明したことを示している(文化庁, 2017)。1865年に黒島から22人が長崎に出て信仰を告白したことがこの時期のことである。このよう

な寺の記載者が激減した時点が、黒島の潜伏キリシタンが信仰告白した時期と似ていることから、仏教徒として寺に所属していたことが推察される。

第二点目は、興禅寺の本堂の観音菩薩立像に聖母マリア像に見立てたことである。文化庁(2017)によると、現在は写真しか残っていないが興禅寺に「マリア観音」の像を密かに安置し、寺院に参拝することを装いつつ、実際にはマリア像に祈りを捧げていたと伝えている。

第三点目は、興禅寺の梵鐘に書かれている人の名前である。1814年に造られた興禅寺の梵鐘には、寄進者として潜伏キリシタンの名がみえ、寺と潜伏キリシタンの密接な関係がうかがわれる(文化庁, 2017)。

これらのことから黒島の潜伏キリシタンは、表向きは仏教徒を装いつつ、指導者を中心として信仰を継続してきたと言える。これは、仏教徒のように見えるようにしながら、実は墓石の向き及び埋葬の方法が仏式とは全く異なる独特の墓地が形成されたことからにも表れている。例えば、仕切牧墓地にある仏教形式の潜伏キリシタン墓の多くは、通常の仏教墓が西向きであるのに対し、東向きである(文化庁, 2017)。

これらの信仰を潜伏してきた結果、島内には牧場設置による移住がはじまった1785年ごろから、1865年に黒島から22名が長崎へ出て信仰告白するまでの禁教期に、約600人のカトリック信者が存在していたと告げたとされている(佐世保市教育委員会, 2011)。これを当時の島全体の人口割合から考えると、仏教徒より潜伏キリシタンの人口が多いこと考える。しかし、人口割合が高いとしても禁教期だったため、島内に踏み絵や仏教徒ではないことが発覚されたときに迫害と弾圧はあった(田中, 1990)と述べられている。

迫害があったにも関わらず、黒島では「非干渉」と「知っていながらあえてそのことに触れない」ということが島内で伝え続けられてきた。つまり、島の秩序のために暗黙的なルールがあったのではないかと推測されている。例えば、生業に関わる漁業の行事(例えば「磯の口開け」)は、宗教に関係なく全島民が共有して参加することが現在まで残り続けている(佐世保市教育委員会, 2011)。

世界には、今までもある一つの地域に異なる宗教が存在する場合、紛争や戦争につながる人が多い。例えば、1983年に仏教に関する世界文化遺産として登録が審議されていた、アフガニスタンの「バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群」は、ターリバーンからイスラムの偶像崇拝禁止の規定に反していることで破壊された。その後、2003年「危機にさらされている世界遺産」として世界遺産に登録され現在は復元が行われている。

しかし、黒島では同じ地域における異なる宗教が必ず紛争や戦争に繋がるわけではなく、地域社会の秩序を保つ共生の考え方があったことがわかる。ゆえに、約80年間もカトリック信仰が続けられたと考えられる。このような地域社会共生の考え方とその考え方から維持可能だった潜伏キリシタンに関する宗教景観は、世界文化遺産として登録し次世代に続ける価値であると考えられる。

IV. 世界遺産を通して地理的な見方・考え方を働かせる授業の構想

前章までの内容を手がかりとして、本章では日本と韓国の高등학교の地理授業で行われることを予想した授業を構想する。

まず、日本の高校生を対象にする際には、2022年度入学する生徒から実施される予定の「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」に基づいて、高等学校「地理探究」を想定する。詳しい内容としては、「A 現代世界の系統地理的考察」の「(5)生活文化, 民族・宗教」に関する授業を構想する。

韓国の高校生を対象とする際には、2015改訂教育課程の社会科教育課程の中で、高等学校選択中心教育課程(進路選択)の科目の中にある、「旅行地理」の「多彩な文化を探しに行く旅行」領域の内容要素として挙げられている「世界文化遺産」の部分想定して授業構想を行う。

1. 単元名

- 高等学校『地理探究』:「キリスト教が禁止された時期に宗教はどのように人々の生活に影響を与えたか」
- 高等学校『旅行地理』:「迫害された宗教はなぜ世界文化遺産になったのか—日本の「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を事例に」
(ただし、韓国の「旅行地理」授業場合は、第3時—第1時—第2時—第4時の順に置き換えた方が望ましいと考える)

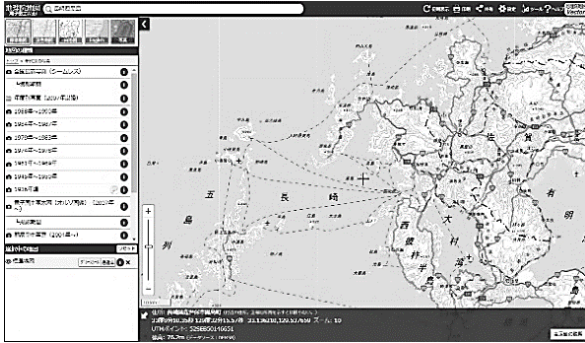
2. 単元の目標

- ①世界遺産として黒島の特性を地理的な見方・考え方の視点を働かせて、多面的・多角的に地域を理解する方法を身に付ける。
- ②課題の解決に向けて、様々な資料の中で、地図の活用に関する技能やGISを活用することができる。
- ③各課題を解決する際に、根拠(例えば、目標②で考察した内容を地図や資料など)に基づいてグループ内で自分の言葉や文章で説明し、グループ内で議論や意見交換することができる。

3. 単元の指導計画および授業展開案

時	主な視点	主な学習活動	学習材
第1時	位置 ・ 分布	課題1:世界遺産「黒島の集落」は、どのような特徴があるのか。特に島内で集落はどこに位置しているのか。 ・地理院地図, google earthを用いた図の重ね合わせ(overlay), 集落の景観写真, 分布図などの分析から, 集落	・地理院地図(第6図) ・集落分布図(第2図)

時	主な視点	主な学習活動	学習材
		<p>の特徴を考察する。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 7つの集落の中でも、宗教ことで代表的な集落(仏教集落: 本村, カトリック集落: 蕨)を比較し, 考察する。 • 「本村」と比較して, 「蕨」で見られる集落の特徴に関して, 根拠に基づいて発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> • google earth (第7図) • 景観写真
第2時	人間と自然環境との相互依存関係	<p>課題2: 「本村」と比較したところ, 「蕨」はなぜ木から囲まれているのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 前回の授業で考察した内用を踏まえて, その理由に関して考える。 • 理由を考える際に, 禁教期に潜伏キリスタンの信仰を守るために行った工夫を考えながら考察する。 • 黒島の集落が世界文化遺産として認定された理由を考えながら, 今現在まで景観として残されているものを中心に発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> • google earth (第8図) • 景観写真
第3時	場所	<p>課題3: 黒島は, 同じく迫害を受けながらも信仰を守り続けた他の地域と比べるとどのような場所なのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> • google earthを用いた図の重ね合わせ(overlay)や分布図を通して, 黒島の集落の形成を踏まえて, 韓国の信仰村はなぜそこに位置しているのかを考える。 • 信仰を守るために, 藩や政府からの迫害から目を避けるために工夫したことは, 黒島と全羅北道の間でどのような共通点と相違点があるのか考える。 	<ul style="list-style-type: none"> • google earth (第8図) • 分布図(第4, 5図)
第4時	地域	<p>課題4: 同じ地域で異なる宗教が共生した地域としての黒島は, どのような意味をもっているか。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 「危機にさらされている世界遺産」と「バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群」に関して調べる。 • 「バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群」の現状を踏まえて, 黒島の地域社会は, どのような特徴と意味をもっているかを考える。 • 最後に, 世界中の宗教葛藤に対して, 同じ地域で異なる宗教が「共生」している黒島がもつ意義を, グループで意見交換を基に発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 世界文化遺産「バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群」に関する新聞記事など



第6図 地理院地図を用いた黒島の位置を確認する画面の例
(地理院地図より筆者引用)



第7図 geotaggingした景観写真をgoogle earthにmash upした例
(google earthを用いて筆者作成)

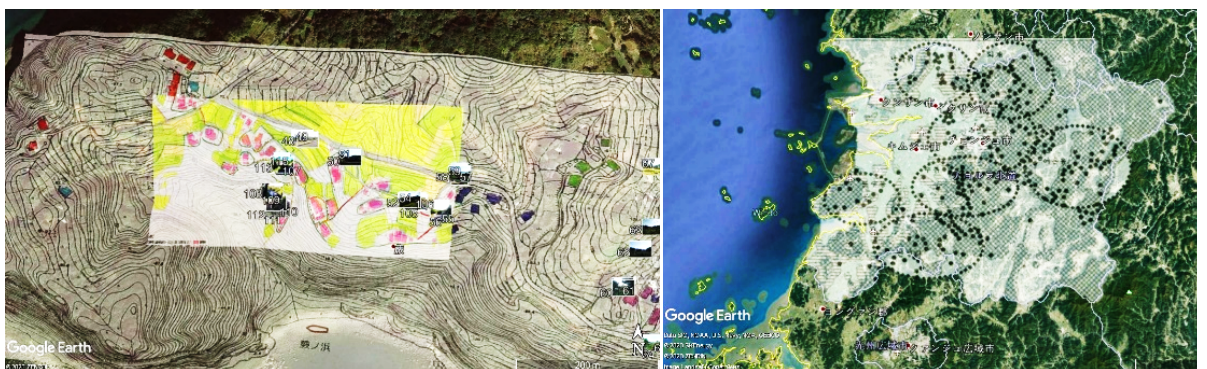
4. 使用する学習材

地理院地図から黒島を読み、黒島の緯度経度、周りの島との関係などを探索する活動から、黒島の絶対的位置(site)と相対的位置(situation)を把握する(第6図)。そして、geotaggingした景観写真をgoogle earthから読み取りmash upすることで、衛星写真(google earth)と景観写真を照らし合わせながら黒島の集落と自然環境の特徴を読み取る(第7図)。

さらに、分布図を読み取りgoogle earthにmash upすることで、分布図の情報と衛星写真や地図の情報とoverlayし照らし合わせ、黒島の集落を分析する(第8図の左)。同じoverlayを活かして韓国全羅北道の信仰村と地形や自然環境との関係を分析する(第8図の右)。

V. おわりに

国際地理学連合(IGU)地理教育委員会(CGЕ)が1992年公表した地理教育国際憲章(中山訳, 1993, p.107)の5大概念の中で、「場所」に対して以下の説明が述べられている。



第8図 overlayを活用してgoogle earthにmash upした黒島(左)、全羅北道(右)分析の例
(google earthを用いて筆者作成)

...人間は、それぞれの信念や哲学にしたがい、文化、集落、社会・経済システム、あるいは生活様式などを発展させる。...

2018年に世界文化遺産に認定された黒島を含む「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、人間が宗教という「信じること」に対して、そして、それを守り続けていくことで、生活様式がどのように営まれていたかを見られる場所である。本研究では、このような世界遺産、黒島を地理的な見方・考え方を働かせる授業素材として見出し、授業を構想・提案した。

本研究では、地理的な見方・考え方を働かせる授業として、いくつかの概念に焦点化して授業構想を行った。そのため、地理的な見方・考え方を働かせる際に取り入れることができなかつた概念がある点や全体的な5つの概念を総括して考えていない点があり、今後の課題である。

謝辞

本研究に関して、長崎県佐世保市黒島地区公民館の皆様、佐世保市立黒島小中学校黒島はまゆう学園の皆様、黒島の地域住民の皆様にお世話になりました。特に、聞き取り調査に応じてくださった公民館長の山内一成様、惣田正宏校長先生をはじめ、授業参観させていただいた佐世保市立黒島小中学校黒島はまゆう学園の先生方々、民宿つるさきの皆様には大変お世話になりました。聞き取り調査では、黒島の歴史や文化の魅力に関する興味深いお話を沢山いただきました。調査にご協力いただいたことに心より御礼申し上げます。

注

- 1) UNESCO World Heritage Centre. <https://whc.unesco.org/en/>
- 2) 2018年7月第32回世界遺産委員会の審査結果、世界文化遺産として指定された。
- 3) 西彼杵半島から五島に移住した潜伏キリシタンを巡って最後の弾圧・迫害事件を指す。
- 4) 大きい規模の迫害として「4大迫害」ある。1801年の「辛酉迫害」、1839年の「己亥迫害」、1846年の「丙午迫害」、1866年の「丙寅迫害」である。
- 5) <第4図>と<第5図>の凡例は筆者和訳である。

参考文献

- 井田仁康(2017):「地理総合」の方向性とGIS. 新地理, 65(2), pp.83-91.
国際地理学連合・地理教育委員会,中山修一 訳 (1993): 地理教育国際憲章 (1992年8月制定). 地理科学, 48(2), 1993, pp.104-119.
今野良祐(2018): 世界遺産を素材とした地理教育・ESD実践の試み:3 科目「世界遺産で学

- ぶ地理」の開発と実践. 研究紀要, 筑波大学附属坂等高等学校, **55**, pp.69-78.
- 佐世保市(2018): 黒島の集落ガイドブック. http://kirishitan.jp/cms/wp-content/uploads/2017/10/07_guidemap_kuroshima_201811-1.pdf(最終回覧日: 2020年5月31日)
- 佐世保市教育委員会(2011): 『佐世保市文化財調査報告第5集: 佐世保市黒島の文化的景観—保存調査報告書—』, 佐世保市教育委員会.
- 佐世保市教育委員会(2018): 『歴史教育副読本ふるさと歴史めぐり』, 佐世保市教育委員会.
- 田中千代吉(1990): 『信仰告白125周年黒島教会の歩み』, 黒島カトリック教会.
- 田淵五十生(2011): 『世界遺産教育は可能か—ESD(持続可能な開発のための教育)をめざして—』, 東山書房.
- 淡野明彦(2006): 小学校社会科学習における世界遺産の教材化. 奈良教育大学紀要, **55**(1), pp.101-112.
- 淡野明彦(2007): 中学校社会科(地理的分野)学習における世界遺産の教材化. 奈良教育大学紀要, **56**(1), pp.103-114.
- 淡野明彦(2009): 高等学校地理歴史(地理 A, 地理 B)学習における世界遺産の教材化. 奈良教育大学紀要, **58**(1), pp.101-106.
- 松井圭介(2012): ヘリテージ化される聖地と場所の商品化. 山中弘編著『宗教とツーリズム』世界思想社, pp.192-214.
- 松井圭介(2018): 潜伏キリシタンは何を語るか—「長崎の教会群」をめぐる世界遺産登録とツーリズム—. 地理空間, **11**(3), pp.253-268.
- 文化庁(2007): 文化遺産オンライン. <http://bunka.nii.ac.jp/Index.do>(最終回覧日: 2019年5月27日)
- 文化庁(2017): 推薦書本文—長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産—. http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/sekai_isan/ichiran/1407709.html(最終回覧日: 2020年5月31日)
- 文部科学省(2018): 『中学校学習指導要領解説(平成29年告示) 社会編』, 東洋間出版社.
- 文部科学省(2019): 『高等学校学習指導要領解説(平成30年告示) 地理歴史編』, 東洋間出版社.
- 최진성 (チェ・ジンソン) (2003): *종교경관의 지리적 해석-천주교경관과 선교전략의 관계를 중심으로-*(宗教景観の地理的解釈—カトリック教の景観と宣教戦略の関係を中心に—), 韓国教員大学校大学院地理教育専攻博士論文.(筆者和訳)